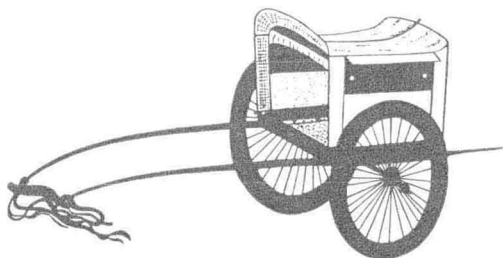




説話文学辞典



東京堂出版

◎編者略歴

大正四年（一九一五）新潟県に生まれる。東京大学国文学科卒。海軍文官教授をへて、現在立教大学教授。文学博士。
専攻—説話文学、古典と近代文学との比較研究。

主著—『日本古典全書今昔物語』（朝日新聞社）。『現代語訳今昔物語』（講談社）。『古典と近代作家—芥川竜之介』（有朋堂）。『学者評判記』（有朋堂）。『平家物語』（社会思想社）。

現住所—浦和市太田窪

一—二〇—二二

説話文学辞典

昭和四四年三月二〇日 初版印刷
昭和四四年三月三〇日 初版発行

定価一五〇〇円

編者 なが 野 嘗^{じょう} 一^{いち}

発行者 岩 出 貞 夫

印刷者 澤 村 嘉 一

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三一五
株式会社 東京堂出版
振替東京二七〇・電話(291)八二二六

凸版印刷／渡辺製本

緒言

一、本辞典は日本の説話文学に関する諸事項を簡明に解説することを目的として編成したものである。だから読者対象は一部の専門家に限らず、一般の人々を想定して編成した。

二、ただし、説話文学の範囲を、古代から中世末までに限り、近世以降のものは除外した。小辞典の關係で、そこまで手を広げることは不可能だからである。また、説話は元来、口頭で伝えられるものであるが、本辞典ではそれらが文章に記録されたもののみに限定した。口承説話にまで及ぶには、さらに多くのスペースを必要とするし、その上、そうした方面にはすでに別の辞典が用意されているからである。

一、本辞典は「説話文学概説」「事項辞典」「説話文学研究文献総覧」の三部より成る。このうち「事項辞典」が中心を成すのはいうまでもないが、「概説」や詳細な「研究文献総覧」も類書にあまり例がないので、われわれとしてはできうる限りの努力を傾けたつもりである。にもかかわらず、なお多くの不満や脱漏が存するのは、われわれの微力のせいであるとともに、説話文学研究の困難を物語るものでもあろう。

一、「事項辞典」に収載した項目は、各種説話集、その著作者、それに説話文学の上に活躍が目立つ人物や頻出する山川・地名・社寺・事物などである。特に人物は、史実と説話との比較に注意し、実際の人物が説話の上でどのような発展・変貌をとげたかを、判明する限り明らかにした。ただ、

なにぶんにもスペースが極度に制限されているのと、古代の人物に関する史実が不明瞭なものの多いために、努力が十分な成果をあげたとはいいがたい。なお、「事項辞典」については、その「凡例」を参照されたい。

一、本辞典の執筆は、長野嘗一・平山城児・高橋貢・石原昭平・麻原美子・石井次彦・宮本瑞夫・志村有弘・鶴田洋子・和田英道の十名が分担してこれに当り、そのすべてにわたって長野嘗一が校閲した。各部の初め、各項目の末尾に執筆者の氏名を明記して、責任の所在を明らかにした。

一、説話文学の研究は戦後ようやく盛んとなりはしたが、戦前ではほとんど空白に近い分野であって、それだけに不明の事がらが多に多い。それに、説話が説話集に記録されるまでには口頭によって伝承された過去があり、加えて模写に近い書承も一部には行なわれ、しかもその親本が今は湮滅している場合も多く、これを他の文芸ジャンルの作品と等しなみに扱うには、大いなる危険が伴いやすい。研究の操作はいちじるしく困難だといわざるを得ない。かかる困難に猪突したわれわれの浅慮には責めらるべき誤謬が多くふくまれていると思うけれど、博雅の士の叱正によって徐々に修正してゆきたいと思う。本辞典が説話文学研究の一里塚とはならぬまでも、せめてこのうち捨てられてきた分野へ世上の興味と関心をいくぶんでも引き寄せることができさえすれば、われわれとしては満足である。

凡 例

編纂の趣旨

一、本辞典は三つの要素から成り立っている。

(1) 説話文学に登場する人物・社寺・地名・物品等について、その歴史的事実と説話化された内容とを並記し、いわば説話文学における「詩と真実」を示し、あわせて(2) 各種の説話集、および(3) その作者(筆者)についての解説をほどこしたものである。

一、本辞典は説話文学研究者の利用を眼目としたばかりでなく、一般教養ならびに広く日本文学研究の全般にも資することを目標とした。

記述について

一、解説は次のような順になされた。

(1) 人物 見出しにはその名を掲げ、姓は()内に納めた。ただし、上代の人物の場合はこの限りではない。そのあとに、「俗名」「法名」「生没」「系譜」「官職」「経歴」「事績」の順に記し(但し繁簡により適宜に省略した)、◆マークのあとに説話化された内容を並記した。上代の人物の見出し語は、『日本書紀』の表記を優先させた。生没年は、日本年号の下に()で囲み西暦年を記した。一方が未詳の場合は?マークを用い、双方とも未詳の場合は「××

世紀末の人」のように記した。外国人は西紀だけを記した。なお、人名の呼び方は、男子はすべて訓読み、女子は音読み(鎌倉以降は訓読み)にした。ただし、一般的呼称によって有名なものはそれによった。

(例) 定家(藤原)^{いよとけ} 明子(藤原)^{あきこ} 紫式部^{むらさきしきぶ}

(2) 社寺 見出しには最も一般的な呼称を記し、そのあとに別名・通称などを列記した。「所在」には旧地名を記し、()内に現在地名を記した。そのあとに「宗派」「建立・変遷」「建立者」の順に記し、◆マークのあとに、その社寺に関する説話を記した。

(3) 地名 「所在」には旧地名・現在地名を記し、◆マークのあとに、その地名に関する説話を記した。

(4) 物品 先にその物品についての歴史的事実を記し、◆マークのあとに、その物品に関する説話を記した。

(5) 説話集 見出しの次に巻数を記し、そのあとに、「作者」「成立」「内容」「文学史的価値」「影響」「諸本」「注釈書」「参考文献」(適宜省略)の順に記した。「影響」には後世の文学への影響、ことに近代作家への影響にも留意した。「諸本」には、活字本がある場合、それを明記し、読者への便宜をはかった。

(6) 説話集編著者 見出しには名を掲げ、姓は()内に納めた。そのあとに、「俗名」「生没」「経歴」「編著作品」「文学史上の位置」「参考文献」(適宜に省略)の順に記した。

一、本文の表記は現代かなづかいによった。ただし、引用文は原文のままである。漢字はできるだけ当用漢字を用いたが、固有名詞などはその限りではない。

一、引用文の出典が『日本古典文学大系』（岩波書店）に収録されている場合には、そこから引用した。説話番号も該書に拠った。

一、書名・作品名などは『』で囲み、説話集の各挿話題名・引用文・論文名などは「」で囲んで示した。

一、各項目の見出し語となっている人物・社寺・地名・物品等が他の項目の本文中に記された場合、その右上肩に*マークを付した。この*マークを活用することにより、関連諸項目の検出が容易に行なわれるであろう。

一、各項目について各種の異称・別名などが存在する場合、それらの中の主なものを小活字の見出し語とし、その下に↓マークを付し、本辞典に扱われている見出し語を示し、検索に便宜をはかった。

一、各項目の解説には紙面の許す限り（ ）内に出典を明記し、記述の正確を期するとともに、原典に興味を抱いた読者への便宜をはかった。

一、引用された各書名は、なるべく省略しないようにつとめたが、適宜略称を用いた場合もある。以下にその略称の中の主なものを記しておく。

記

古事記

往生極楽記

日本往生極楽記

紀 日本書紀
風 風土記（例えば「播磨風」のように）
靈異記 日本国現報善惡
続 紀 続日本紀
三代実録 日本三代実録
紀 略 日本紀略
編 年 記 帝王編年記
略 記 扶桑略記
一、各項目は、左記十名の分担執筆によるもので、その署名は各項目の末尾（ ）内に明記した。

監修・編纂 長野賞一

執筆者

麻原美子 石井次彦 石原昭平 志村有弘

高橋 貢 鶴田洋子 長野賞一 平山城児

宮本瑞夫 和田英道（五十音順）

目次

緒言	前付一
凡例	前付三
説話文学概説	前付五
本文	一
説話文学研究文献総覧	四〇三
索引	五一〇

説話文学概説

長野 尊一

説話文学概説

第一章 説話文学とは

説話文学の定義については古来いくたの説があるが、ここでは次のように規定しておきたいと思う。

それは「事実」または「事実」と信じられて語られてきたことを、文学化したものをさす。だから、「虚構」を生命とする「作り物語」とは、素材の点で区別される。

また、それが文章に定着する以前には、「話」として人の口から口へと伝承された過去があるから、同じく事実を素材とするものではあっても、いわゆる「日記文学」や「歴史物語」とは、口承性の有無の点で区別される。

さらに、その「話」は普通、一気に話し終える種類のものをさし、長時間、幾日にもわたって語り継がれるものはふくまない。したがって、説話文学は短編的であり、長編的な構成は採らないのを原則とする。けだし、「話」の持続にはおのずから生理的な限界があり、長時間にわたるそれ

が困難なことに起因しよう。それに「事実」に対する即座の認識にはおのずから限度があつて、多くの「事実」を同時に認識し、それらを組み立てて広範にわたる透視を得るには、「時」と「思考」とを必要とするからである。だから『平家物語』のような作品は「説話文学」の範疇には入れない。事実もしくは事実と信じられていたことに取材し、過去に語られた実績があつたにしても、個々の事実を組織して長編構成の意図を有するからである。ただし、その中の或る部分、個々の事実に基づく小単位の「話」は、それだけ取り出して「説話文学」と称することが可能である。これは『大鏡』や『栄華物語』のごとき「歴史物語」においても同様である。したがって本辞典でも、それらの「部分」は説話文学として取り扱うことにした。

最後に、「説話」と「説話文学」との相違について一言したい。説話文学が説話を文学化したものであることはいうまでもないが、この両概念の間にはやはり劃然たる一線を引くべきであると考ええる。「話」をそのまま速記したものが、いかに非芸術的なものであるかを想起すれば、このことは容易に理解されよう。無駄や繰り返しの多い「話」が、「文章」に定着するときは、それらが刈り込まれ、語彙も飛躍的に増加するのが普通である。のみならず、筆録者の芸術的手腕によって、構成や描写にも工夫が加えられ、文章も整備されることが多い。だから同じ「事実」、同じ「話」

であっても、文章化されたものには少なからぬ差異が生ずるのを常とする。芸術的な才能の豊かな人と、それが貧しい人とは、作品のできばえに優劣が生ずるのは避けがたい。世上しばしば「説話文学」には独創性をいっさい認めまいとする議論があるが、われわれはそれには賛し得ない。説話文学は『源氏物語』や『枕草子』のように、一人の個性による完全な「創作」ではないけれども、また「話」の単なる機械的な筆録でもない。大勢の協力によってパトンタッチされた「話」が、一人の個性によって文学化されたものと解したい。したがって文学化の度合いの稀薄なもの、話がそのまま筆録されたに近いようなものは、厳密には「説話文学」と称すべきではなく、「説話物」乃至は「説話文献」とでも別称するが至当であらう。ただ、そういうものも、従来は「説話文学」と呼ばれているので、本辞典でもそれらの慣習を重んじて、いちおう「説話文学」として取り扱うことにする。

民俗学では資料としての厳密を期する上から、「話」のなまのまの形態を尊重し、これらを記録するに当っても、記録者の恣意による文飾や芸術化は加えないように留意しているが、民俗学の資料としての価値と、「説話文学」としての文学的価値とは截然として区別されるべきことを、ここに銘記しておきたいと思う。

右にあげた「説話文学」の四つの特性は、いずれもこの

概念の内包する本質的な属性であるが、なお以下に例をあげてもう少し詳しく解説しておく。

第二章 主観的事実

(一) 信ぜられた事実

説話文学は事実もしくは事実と信じられていたことを物語るものであった。

ところで、何が客観的事実であるかの認識ほど、むづかしいものはない。そのためにこそ、古来多くの哲学者や歴史学者が苦勞したのだが、説話文学の語る「事実」とは、そういう客観的事実であるよりも、人々がそうと信じた主観的事実でありさえすればよい。だからそれが客観的事実に一致することもあれば、しないこともありうるわけである。のみならず、或る事実が甲の人々には歴とした主観的事実であるにもかかわらず、乙の人々にはそうでないという乖離も起りうる。霊鬼天狗の存在がまじめに信じられていた時代の「霊鬼譚」は、その時代の人々にとっては歴とした主観的事実であったが、それが信じられなくなった現代では、もはや主観的事実ではあり得ない。したがって、この二十世紀に古代の如き「霊鬼譚」を「説話文学」として成立せしめることは、不可能もしくは著しく困難である。しかし、現代でも、或る種の民族、或る種の人々、特に幼児にとつては、それは依然として存在しうることもまた確かである。

されば主観的事実は、時間および空間の流動に伴って流動することを、まず確認しておかなければならない。それは一般的に文明の進歩によって大きく流動すると考えられているが、必ずしもそれだけではない。たとえば神仏の存在をあつく信ずる者にとっては、神仏に関する説話が十分成立しうるにかかわらず、それを信じない者にとっては成立の根拠を失ってしまう。さらに、平常は神仏や霊鬼の存在を信じない人でも、或る瞬間、特殊な心的状況のもとでは、それを信ずることがある。人を殺害した犯人が被害者の亡霊に悩まされた話を、あなたは聞いたことがないだろうか。さらにまた、巧妙に語られた話や、巧みに芸術化された説話文学では、それらを信じたくなることもある。鬼気せまるミステリー・テールズを、あなたは読んだことがないだろうか。神秘的な物語でありながら肌に粟を生ずるほどの迫真感、少なくともその瞬間に感情移入が十分に行なわれていることを実証して余りある。

主観的事実がいかに流動性に富んだものであるかということは、以上の例示によって明らかであろう。説話文学はかかる主観的事実を物語る文学である。この特質を利用して、故意に事実を曲げ、もしくは捏造して語ることも不可能ではない。そうしてそれを聞き読んだ人々が、事実と信じてしまうこともまれではない。つまり、最初にそれを語った人は、うそと知りつつ話したことであるのに、それを

聞き伝えた人々は逆に事実と信じてしまうのである。

(二) 二つの主観的事実——今昔物語集の例

『今昔物語集』の卷二十三第十五「陸奥前司橘則光、人を切り殺す物語」は、その間の消息を物語る。——今は昔、陸奥の前司橘則光は、武士の家柄ではないが、肝太く、思慮に富み、力の強い男であった。その則光は若いじぶん、一条帝の衛府の蔵人を勤めていたが、或る夜、内裏の宿直所から女のもとへ忍んで行った。馬にも乗らずに徒歩で、小舎人童一人を供につれ、太刀だけをひきつけて、大宮大路を南へ下った。当時の京都の夜は物騒だ。盗人が出没し、百鬼が夜行する。はたして、大内裏の大垣にそうた暗い箇処で、則光は曲者たち呼び止められた。「あの過ぐる人まかり止まれ。君達のおはしますぞ。え過ぎじ」という底冷えのする声が飛んできた。南無三、とは思ったが、もはや距離が近すぎて、引き返す余裕がない。そこで、ままよとばかりに、則光は足ばやにそこを通り抜けようとした。すると「さてはまかりなむや」(ええい、無事に通れるものか)と追いかけて来る者がある。体をかがめて闇の中にすかして見ると、弓影は見えず、太刀の先だけがキラリと光る。飛道具ではないとやや安心した則光は、背中を丸めて逃げる。それを、曲者は所も置かず追いかけて来る。頭を打ち破られるかと思った瞬間、則光は俄かにかたわらへ身を寄せた。とっさのことで曲者は走りはやまって前へ出る。

そこを抜く手も見せずに一太刀浴びせると、曲者はそのままうつ伏せに倒れた。

やれやれと一息つく間もなく、「あれはいかがはしたることぞ」と、また走りかかって来る者がある。則光は太刀もさしあえず、脇にはさんで逃げるのを、「けやけき奴かな」(猪口才な奴め)と追いかけてくる第二の曲者は、初めの奴よりはいちだんと脚が速い。これはとても初めのようにはゆくまいと観念した則光は、突如道のまん中にうずくまる。と、相手はそれに蹴つまずいて倒れたではないかこの一瞬の好機をのがさずに打ち下ろした則光の太刀は、うまい具合に相手の脳天を割った。

これで助かったかと思っていると、また一人、「けやけき奴かな。さてはえまからじ」と走りかかって来る者がある。今度はだめだと思った則光は、「仏神助け給へ」と念じつつ、相手の腹に向かって太刀を鋒のように突き出した。曲者もまた太刀を振り上げて切りつけんとしたけれども、それより一瞬早く、則光の太刀の先が相手の腹へ突きささっていた。太刀を振り上げ振りおろすよりも、それを単に突き出す方が早いものだ。至近の距離がこの時は則光に幸いしたのである。

まだいるかと耳をすませたが、どうやらこれで終りらしい。供の小舎人童とは見れば、泣く泣く大宮大路を北の方へ逃げて行く。それを呼びもどし、内裏の宿直所へやって

着替えを持参させてそれに着替え、血のついた太刀の束を洗い、童にはかたく口外を禁じて、もとの宿直所へ帰り、何食わぬ顔で入り臥した。

寝てはみたものの、胸騒ぎでなかなか寝つかれない。相手は盗人とはいえ、とにかく人三人を殺したのだ。不安な一夜を則光は明かしたが、翌朝になると、はやくもごうごうのうわさが立っている。「大宮大炊の御門の辺に、大の男三人を、いくほどもへだてず切り伏せてある。互いに切り死にしたのかとも思うが、どれもみな同じ刀の使い様だ。それにしても何とあざやかな太刀さばきよ。敵のしわざか、盗人のしわざか」などと人々は言い合っている。「いざ行きて見む」と、殿上人たちから則光もさそわれた。行きたくないとは思ったが、しいて行かぬのも怪しまれるもとかと考えなおし、彼はしぶしぶについて行く。

牛車に乗りこぼれて行つて見ると、死骸はまだそのままに置かれていた。ところがそのかたわらに、一人の奇妙な男が突っ立って何事かわめいている。三十歳ばかりの、鬚の(はほひげのいっばい生えた)男で、指をさしたり、脇をかいいたりしながらわめくのを聞けば、この下手人であるという。「どうしたのか」と殿上人たちが尋ねると、その男は片膝をつき、真っ赤な目で、太刀の束に手をかけながら、得意そうに語り出す。「昨夜半、所用でここを通り過ぎますと、曲者三人、やらじとばかりに立ちふさがつ

て切りかかりました。てつきり盗人と思いましたが、バツバツと三人立ちどころに切り伏せましたが、今朝見れば私を多年つけねらっておる敵の者どもにござりました。されば彼奴らの素首、ねじ切つてやるうと思ひおります」と言うではないか。

聞いていて則光は奇妙な氣になり出した。真の殺害者はここにおるのと思えばおかしさがこみあげてくるのだが、こうしてみずから下手人と名乗る男が出現した以上、殺人の罪も功名も同時に譲つてやれという氣になった。

このことは則光が老いの果てに子どもに向かつてひそかに真相をうちあけたのを、語り伝えたということである。

これがこの説話の梗概である。これで見ると、この殺人事件には、二様の話が伝承されたことになる。『今昔物語集』では則光の話を伝えたのだが、かの鬘髻の男の談を伝えた説話もあったはずだ。ただ、その話は単純な殺傷説話であつたために、話し手の熱意にもかかわらず、聞き手の興味が永續せず、まもなく減んだものであろう。これに反して則光の語つた話は、人間心理の真実をうがっていたために、聞き手にいたく興味を持たれ、やがて『今昔物語集』の作者に採録されて今日に伝承されたものであろう。が、考えてみれば、則光の話とても、はたして真相であるかどうか、疑い出せばきりが無い。われわれは普通それを真相

だと信じているのだが、真相と断定する確証があるわけではない。ただ、鬘髻の男の話が単純なのに比して、則光の話は複雑でおもしろく、人間心理の真実をうがって思わず膝をたたきたくなるほどの迫真力をそなえている。人を切り殺す時の心理はげにかくもあらんと思はせるほどの迫真は、則光の話しぶりもさりながら、それを文章化した『今昔物語集』作者の芸術的手腕とたたえざるを得ない。それに、他人の功を横取りして豪傑を気取る鬘髻の男の点出そのものが、すでにりっぱな人間描写である。虚栄心という人間の本能を剔抉して、これほどあざやかなものはない。その男の告白を聞いている時の則光の複雑な心理の綾も点綴して、けだし『今昔物語集』の中でも十指に数えらるべき傑作であらう。

ともかく、これは一つの客観的事実の存在に対して、幾通りかの主観的事実が同時に存在しうることを証して余りある。まして、殺害という外面的な事実是一であり、被害者も被害者もまた同一であつたにしても、なぜに、どんな氣持で殺害したかというような内面的事実になると、全く複雑多岐、どれが真相か分らぬことがしばしばある。歴史の真実がいかに把握しにくいものであるかは贅言を要しない。

(三) 二つの主観的事実——平家物語の例

もう一つ例をあげる。それはかの『平家物語』に見える

鬼界が島における俊寛の説話である。——丹波少将成経・平判官康頼・俊寛僧都の三名は、鹿が谷の隠謀が発覚して、遠く南海の鬼界が島に流される。のち中宮徳子平産祈禱の大赦によって成経・康頼の兩名は赦免されて都へ帰るが、ひとり俊寛のみは赦免にもれ、むなしく南海の孤島に朽ち果てる。侍童の有王は主人を慕って島へ下り、その最期をみとり、遺骨をひろって京へ帰る。——というのが事件の荒筋である。ところが、これに対して、いろいろな枝葉がつけ加わり、あの説話が成立する。

元来、鬼界が島における俊寛の動静を伝える話のルートは、二つしか考えられない。一つは先に帰洛した成経・康頼兩人の口から出たもの、もう一つは後に島を訪れて帰った有王の口から出たもの、この二つである。もし俊寛自身が帰洛すれば、また別のルートが加わり、説話の様相もがらり変ったかもしれないのだが、彼はかの島で死んでいるのだから、自己弁解の機会はついに与えられなかったわけである。

さて『平家物語』巻二によれば、初め三人いっしょにいたじぶんは、寂しいながらも互いに慰め合い、助け合って暮らしていた。ことに成経の舅(夫人の父)にあたる平教盛の領地が肥前国鹿瀬荘(今の佐賀市附近)にあつて、そこから衣食の料が送られてきたので、それを三人分け合いながら、ほそぼそと寿命をつないでいた。(成経が情け深

い人として描かれていることに注意されたい。)

また、康頼と成経は「もとより熊野信心の人々にておはしければ」(巻二、祝言)、この島の中に熊野の三所権現を勧請し、そこへ毎日参詣しては帰洛の願をかけていた。ところがひとり俊寛だけは「天性不信第一の人にて是を用ゐず」(同上)、神も仏もあるものかとばかり、二人に同調しなかったという。康頼はさらに千本の卒都婆を作り、それに和歌を書きつけて、潮の流れが本土の方へ向かう時に、一本ずつ波に浮かべたという。そのうちの一本が厳島神社の浜辺に流れ着き、それが都へ伝えられて、老母や妻子に届けられたばかりでなく、後白河法皇や平清盛・重盛父子にも見せられた。

潮風

さつま潟沖の小島にわれありと親にはつげよ八重の
おもひやれしばしと思ふ旅だにもなほふるさとは恋
しきものを

さすが強情我慢の清盛も、この望郷の念切々たる流人の歌を見せられては、哀憐を禁じ得なかったという。

あげくの果てに、成経・康頼兩名は赦免になり、俊寛ひとり後に残されるのだ。この三人は罪も同じ罪、配所も同じ配所であるのに、なぜ赦免の時にこうした差別待遇が生じたかを説明して『平家物語』は次のようにいう。「入道相国(清盛)「康頼法師が事もさる事なれども、俊寛は

るぶん入道が口入をもつて人となつたるものぞかし。それに所しもこそ多けれ、東山鹿の谷、わが山庄に寄りあひて、奇怪のふるまひどもがありけんなれば、俊寛をば思ひもよらず」とぞのたまひける。(巻三、敍文)これは中宮(清盛女徳子)の平産祈禱のためには非常の大赦にまさる功德はないとされ、鬼界が島の流人赦免のことを教盛(成経舅)が懇願し、その意を受けた重盛が父にすすめたときに答えた清盛の言葉である。これによれば、俊寛は清盛の口入によつて立身したにかかわらず、平家打倒の謀議におのれの山庄を提供するとは以ての外と、清盛の怒りが特にはなはだしかったために赦免にもれた、ということになる。

かくして、いよいよ赦免使がかの島に到来し、成経・康頼二人の喜びとうらはらに、俊寛ひとり足摺りをして、せめては九州の地までの同行を哀願するが、それすらも許されない。見るに見かねた成経は、「まずわれらが上洛して人々にもよく申し合わせ、入道相国の気色をもうかがつて、必ず赦免の許諾を得、お迎えに人々を奉らう。それまではどうか生命を大切に待っていて下されい」と慰撫するのである。去り行く船に取りすがつて「これ乗せて行け、具して行け」とおめき叫んだ俊寛は、渾に倒れ伏したまま露にしておれて一夜を明かすのであるが、「さりともし将(成経)は情けふかき人なれば、よきやうに申す事もやと憑みをかけて、その瀬に身をだに投げざりし心のう

ちこそはかなけれ」と、『平家物語』はこの悲劇のクライマックスを結んでいる。

そもそも成経は鹿が谷事件の主謀者ともいふべき新大納言成親の子であるから、罪は最も重いはずである。その成経が赦されて俊寛が取り残されるのは、たしかに不公平のそしりをまぬがれまい。しかし成経は平教盛の婿であるために、教盛の口入懇願によつて赦されたに違いない。その成経を『平家物語』は「情けふかき人」となし、舅の領地から送られてきた衣食の料を他の仲間にも分ちあたえ、島を去る時も言葉を尽くして俊寛を慰めるなど、十分の好意をもつて描いていることに注意したい。これは成経が事実そうであったのかもしれないが、なお先に帰洛した彼本人や康頼の口からこの説話が語られたために、自己を正当化する偽装がなされた結果ではあるまいか、という嫌疑が濃厚である。成経にしても康頼にしても、自分らが赦されて帰ったのに、俊寛一人が取り残されたことに負い目を感じたはずである。心の鬼に責められたはずである。その責め苦をいくらかでも軽減するために、そうしてまた俊寛身寄りの者にこの不公平な運命の由来をいくらかでも納得させるために、特に力説強調したことが流伝した結果ではあるまいか。

それは康頼や俊寛を描く場合にもあらわれている。康頼は鬼界が島に熊野権現を勧請して、毎日参詣を怠らず、成

経がそれに同じた、とあった。ただひとり俊寛のみは「天性不信第一の人」で、これにならわなかった、とも記されていた。なるほど苦しい時の神頼みで、彼らが俄かに神仏に頼る気持は十分うなずける。ことに康頼は流される途中で出家したのでから、この新発意しんぱちとしては不毛の孤島にも何とかして神仏を勧請したいと考えたであらう。在俗の成経までがそれにならったのも不思議ではない。

ところが俊寛一人は「天性不信第一の人」で、参詣を拒否したというのである。しかし彼は元来法勝寺しやうじやうの執行で、彼だけが僧体をしていたはずである。いかさま当時の僧侶は必ずしも篤い信仰に燃えて入信したものばかりではない。単に衣食のため、または立身出世のために僧衣をまとった者もある。が、それにしても、多年仏に仕えて説経を事としてきた者が、「天性不信第一の人」とされるのはうなずけない。こにも故意による作為が感じられてならないのだ。自分らが赦されたのは熊野信仰のおかげであるが、俊寛はそれをしなかったために赦免にもれた——これは熊野信仰を強調する者としては、はなはだしく都合のよい解釈である。

今日、この説話は主として康頼の口から出、それが熊野信仰団の人々の口から口へ伝わって『平家物語』に採り入れられたと考えられているが、右のごとく一見しただけでも、この推定には十分の根拠があらう。

のち、有王がかの島へ下り、俊寛の後日譚を伝えて、そ

れがまた『平家物語』に撰取される。帰国した有王は高野へ上り、俊寛の遺骨を奥の院へ納め、みずからも蓮華谷で法師になり、諸国七道を修行して主人の後世を弔ったという(巻三、有王)。されば彼の口から出た話は高野聖たかのひじりたちによって流伝され、それが『平家物語』に採り入れられたものであらう。が、それらはすでにあまねく流布されている康頼・成経の口から出た話を変更するだけの力はなく、たんにその後の話を伝えるにとどまったのもあったらうか。

以上二つの例によっても、主観的事実がいかに流動しやういかが理解されると思う。一つの客観的事実に対して、時には二つ以上の相反する説話が時を同じゅうして流布されることもある。英雄や偉人の死地が各地に存するとの言い伝えは、かくして生じたものである。このようにそれらが共存することもあるが、また先の二説話に見たように、強力なものが弱きものを征服してゆくこともある。しかもかかる説話の力の強弱は、事実に対する距離の遠近に必ずしも正比例するのではなく、それを信ずることの厚薄によることが多い。信じやすい条件、信じやすい人々の間に流布された説話は、客観的事実のいかんにかかわらず、継承発展してゆくものである。宗教に関する説話には、特にこの傾向が著しい。或る種の神仏、宗派、寺社に関する靈驗・奇瑞等の説話は、その信仰圈内にある人々の間には、またたく間に主観的事実として伝播されてゆく。

(四) 奇異なる事実

説話はこのように主観的事実が語り伝えられたものであるが、主観的事実のいっさいが説話として伝承されるわけではない。平凡な事実、当り前の事実、語り伝える値打ちがないものとして抹殺される。珍しい事実、奇異なる事実でなければ、それは説話化することはない。『今昔物語集』には、これは奇異なる事実だからかように語り伝えただのたというような説明がしばしばなされており、『古今著聞集』では「珍しかりける事也」という文句がたびたび見えている。まさしく「奇異」「珍奇」こそは説話発生の契機であるといつてよい。その事実を見聞いた人々が奇異だ、不思議だと感じたればこそ、それは説話として語り継がれてゆくのである。

ただし、この「奇異」は、ありうべからざることの意ではない。荒唐無稽な事実ではない。即座に荒唐無稽と判断されるような事柄では、人々がそれを信ずるはずがなく、信じなければ主観的事実とはなり得ないからである。それはありうべからざることではなく、十分ありうべきことではあるが、そうめつたには起り得ないことの意と解すべきであろう。「奇異」とはつまり「稀有」なること、まれにしかあり得ないが、まれにはあることの意味である。したがって、まれにしかあり得ないことがしばしば起り、それがしかも一つのパターン(型)と化するようになっては、説話

としての新鮮味が薄れ、その信憑性もまた次第にゆらくことにもなりかねない。功德を積んだ高僧などが往生する時に、空には紫雲がたなびき、妙なる樂の音が聞えるというような往生譚は、すでに定型化されて、当時としてもいちじるしく鮮度が落ちたものといわざるを得ない。往生譚が文学として光るのは、往生の様相そのものにあるのではなく、それに至るまでの功德の積み方のいかんにかかわるといってよい。『今昔物語集』の卷十九第十四「讃岐国、多度の郡の五位、法を聞きて即ち出家する物語」は、出家往生譚であるが、極悪人のそれであるところに異色がある。極悪無道の荒くれ武士が、ひとたび説法に感激するや、即座に頭を剃り、阿弥陀仏のおわすと聞く西へ西へと歩きつづけ、西に大海の開けた岡の上で、弥陀の声を聞いて往生する物語である。性格の一徹、悪から善へと急転する落差の大、悪に強い者は善にも強いという金鉄の意志を描いて読者の意表を衝く。出家場面における切迫したセリフのやりとりとともに、これまた屈指の好編である。かかる極悪人が俄かに出家し、そのまま数日歩きつづけて往生するなどということは、そうめつたにあることではない。が、まれにはありうることであり、起った場合には無上の感動をあたえるために、異色の説話として広く長く伝承されたものである。『今昔物語集』を初めとして、『宝物集』『発心集』『私聚百因縁集』等にもこれが採られたのは、ひとえにそ